慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大原總一郎著 化学繊維工業論
Sub Title	
Author	佐藤, 芳雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.8 (1961. 8) ,p.730(120)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610801-0120
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610801-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大原總一郎著『化学繊維工業論』

化学工業は今日のいわゆる「産業構造の高度化」「技術革新」の中心的なにない手である。化学繊維は、そのさきがけであり、直接的消費にむすびつき、従来の繊維生産・消費の構造を大きく変化させてきた。この比較的あたらしい産業、しかもきわめて急速なテンポをもって動きつつある化学繊維工業について、これまで商品学的説明や部分的な業界の分析は多々あったが、その体系的な本格的な研究は少なかった。

この書は、その意味で、化学繊維工業の諸問題についていままでにない、技術的・歴史的・資料的に内容の豊富な書である。それはなによりも著者が倉敷レーヨンの社長の位置にあり、経験と集大成された資料を駆使して完成されたものであることによるといえよう。

まず第一章緒論において、この産業の特色・地位・役割が概括され、二・三・四・五章で、世界およびわが国の化学繊維工業（レイヨン・合成繊維）の歴史とその特色がのべられる。六章は、化学繊維の生産技術の進歩と技術的特質、加工技術の変化が説明され、七・八章は、消費の面から、他繊維との競合、貿易市場の問題点が検討される。九章は原料（価格）問題、十章において、加工工業の分野である絹人絹織物業との関連、系列化の進展、さらに化学繊維の価格形成のうえで重要な取引所の機能と役割がとりあげられる。十一章は化学繊維工業の資本と経営として、原価構成、財務構成、企業資本充実の諸問題が、企業経営の視点から考察されている。以上の本文のほか、詳細な索引・付属統計表・参考資料・文献がつづく。

本書はもともと著者が東京大学で行なった「化学繊維工業論」の原稿を整理されたもののようである。いわゆる「産業論」として、この産業部門のさまざまな事情・歴史・特色・問題点がかなり網羅的に展開されていることではまさに圧巻であるが、それらを貫く分析視角というものが明らかでないうらみがないでではない。とくに、この産業の急速な発展の諸要因、ビッグ・ビジネスの間の寡占的競争の態様のつっこんだ分析や、価格形成、下位加工分野の「二重構造」依存の現状、繊維産業全体の将来、などの諸問題の関連・客観的見通しについて多少のものたりなさを感じさせる。しかし、この産業をになう地位にある著者の、その立場からする種々の「発言」とみられる諸点は、きわめて示唆にとみ、総じて本書は、多面的な性格をもつ化学繊維工業の全貌を把握するのに他に類のない著書であるといえる。（東京大学出版会・A5・本文五〇二頁・付録一三四頁・九五〇円）

—佐藤　芳雄—

＊　＊　＊

カール・マルクス著 マルクス＝エンゲルス全集刊行会訳『資本論』（第一分冊）

われわれ『資本論』に学ぶものにとって、それを読みながら常々感じることは、その比類ない難解さということではなかろうか。全三部よりなっている『資本論』は、マルクス自身の手で仕上げられた処は第一部のみにすぎず、第二、第三部は草稿ないし未定稿という形で残され、エンゲルスの助力を得て現行のような姿をとるにいたった。したがって、とくに第二、三部においては草稿ないし彼の抜書きがそのまま入ってきており、それらを一貫した・統一的な論述として理解することは非常な努力を要する。また第一部においても（あるいは全体的にも云えることだが）全体を統一している独自の論理とそれからする内容そのもののもつ奥行きの深さは読者に相当の覚悟を要求する。かかる「難解さ」を克服し、マルクスの云わんとすることをより良く伝えようと、『資本論』は刊行以来幾多の版本をもつことになった。わが国においてもすでに数種に及ぶ訳業があり、それらが日本語をつうじてマルクスの思想を正しく伝えようとする為の企図からであるとともに、多くの訳業に、わが国における資本論研究——マルクス経済学研究——の発展が貢献していることは否定出来ない。今度、新たな訳業のなった『資本論』の訳者たちも、かかる過去の研究の成果を高く評価し、その現われとしての新訳の意義を強調していることに注意する必要があろう。

さて、マルクスが『資本論』に関する仕事にたずさわった時期は一八六〇年頃から彼の死（一八八三年）まで約二〇年間にわたる。そして現行の第一部が刊行されたのは一八六六年である。従って数年後にわれわれは刊行一〇〇周年を迎えるわけである。資本論執筆時代がまさに国際労働運動史上最も重要な時期であり、その主要なる指導者としての忙しい毎日を送りつつ、病いと闘いながら『資本論』が書かれたように、以後の資本論研究の歴史は国際労働運動・社会主義運動及びそれらへの反動＝弾圧の中で遂行された。資本論研究の一世紀にわたる歴史は、そのまま労働運動・社会主義運動の一世紀の歴史でもあった。いま、最新版『資本論』を手にして、その歴史をさらに深く回顧するとともに、そのゆく手をみつめなくてはなるまい。

新訳は、現行アドラツキー版、最新版本である東独デイーツ社版をテキストとして訳出し、現在刊行中のマルクス・エンゲルス・レーニン研究所編纂『マルクス・エンゲルス全集』第二三—二五巻所収『資本論』（K. Маркс; Капитал. Критика политической экономии. 1960-61）の訂正と注解とを取入れ、その他各国語版本が参照されている。現在、すぐれた訳本として長谷部文雄、向坂逸郎両氏のものがあるが、それぞれ訳文に特徴があり、それが難点ともされてきた。新訳では、日本語として通じるということを目標に両氏の訳の長所をとり、無理のないものにしている努力がみられる。特に留意されるべき処は、テクニカル・タームの訳が、長谷部・向坂両氏のごとき独自の解釈によらないで、学界での永年の論争の成果としての共通のタームが用いられていることである。また巻末に人名文献索引がつけられている。かかる点にも、読み易い『資本論』をめざした訳者達の意図はある程度まで成功しているのではなかろうか。（大月書店・国民文庫版・二八九頁・一五〇円）

—飯田　裕康—

＊　＊　＊